

第 5 回

教育改善活動フォーラム (旧教育改善活動報告会)

記 録

2011 年 10 月 22 日(土)開催

共 催

FD 推進委員会・教務委員会



目 次

| | | | | |
|-------------------------|-----------|-------|----|----|
| 第5回 教育改善活動フォーラムの開催にあたって | 学長 | 衛藤 卓也 | …… | 1 |
| 第5回 教育改善活動フォーラム記録 | | | …… | 2 |
| 第一部 教育開発支援機構（仮称）の概略説明 | | | | |
| | 教学担当副学長 | 馬本 誠也 | …… | 3 |
| 第二部 基調講演 | | | | |
| 「今、求められる学修支援について」 | | | | |
| | 順天堂大学名誉教授 | 北森 義明 | …… | 6 |
| 第三部 パネルディスカッション | | | | |
| 「今、求められる学修支援について」 | | | …… | 10 |
| パネリスト | 教学担当副学長 | 馬本 誠也 | | |
| | 順天堂大学名誉教授 | 北森 義明 | | |
| | 理学部教授 | 黒瀬 秀樹 | | |
| コーディネータ | 教務部長 | 今泉 博国 | | |
| 閉会の辞 | 教学担当副学長 | 馬本 誠也 | …… | 22 |
| 参加者数およびアンケート結果 | | | …… | 23 |

第5回 教育改善活動フォーラムの開催にあたって

学長 衛藤卓也

今回で5回目となります教育改善活動フォーラムにご参加いただき、ありがとうございます。本日は基調講演の講師として、順天堂大学名誉教授の北森義明先生にお越しいただいております。どうぞよろしくお願いいたします。

本日のフォーラムあるいは北森先生の講演のキーワードは自己の探求、先生は“自己探（ジコタン）”と言われているようですが、そこにあるのではないかと思います。そこで私が挨拶代わりにそれを位置付けてみたいと思います。

大学というところは知の領域を扱うところですが、知の種類には専門知や教養知というものがあります。これらをまとめて学問知と言っておきます。それから、もう一つ経験知や生活知というものも重要ではないかと思います。専門知や教養知が論理的な思考力やものの見方、判断力を養い、一方で経験知、生活知というものがその人のマナーや道徳、道理、忍耐力など様々な精神的なものを養うのではないかと思います。そしてそれらが融合して一人ひとりの知性や品性、人間性というものにつながっていくのではないのでしょうか。

これらの知が上の層にあるとしますと、そういう知に対してもう一つ下の層では、意識（モチベーション）というものが重要になってくるのではないかと考えています。我々教員サイドは知の教育を授ける側にありますが、学生は知を授けられる側にあるということで、我々は形式的・内容的にもアクティブな側にあり、学生側はパッシブな側にあることができます。そこで、大切なことは、パッシブな側にある学生が知を吸収するときには、学生がアクティブな、つまり自主的な意識を持つようにさせることです。

北森先生のキーワードには、意識面ではパッシブなものをアクティブなものにするという意味合いがあるのではないかと解釈しております。自分のあるがままの姿を分析する、あるいは分析してもらって自分を知ることが非常に学生の意識・モチベーションを高める力になるのではないかと思います。

皆様方が本日のフォーラムから何らかの教訓を得られればありがたいと思っております。本日はしばらくおつきあいのほどよろしくお願いいたします。

第5回 教育改善活動フォーラム記録

平成23年10月22日(土)福岡大学A棟A201教室において、FD推進委員会と教務委員会の共催による「第5回教育改善活動フォーラム」を開催した。

当フォーラムは、本学の組織的な活動の一環として、各組織の取り組みや成果を全学的に共有することにより、さらなる教育改善に生かすことを目的として開催してきた。

現在、FDの全国的な流れは、委員会方式によるFD活動から、FDに係る専門的な知識を有する教員を含めた専門組織を中心としたFD活動へと向かっている。

本学においても数年前からFD専門組織の必要性が論じられており、FD推進委員会からの「全学的FD推進組織に関する答申(平成22年度)」に基づき、平成24年4月1日開設を目標に「教育開発支援機構(仮称)」の準備が進んでいる。

そこで、今回のフォーラムでは、本学の組織的なFD活動を推進し、学生の学修を支援するために設置される「教育開発支援機構(仮称)」について、設置準備委員会での議論の内容に沿って、現在想定される機構の概要説明を行った。その後、学生の学修支援に注目し、「今、求められる学修支援について」と題した基調講演とパネルディスカッションを実施した。

第一部では来年度設置される教育開発支援機構(仮称)についての概略説明を馬本副学長が行った。

第二部の基調講演では、北森義明順天堂大学名誉教授をお迎えして、「今、求められる学修支援について」というテーマでお話いただいた。

続いて、第三部のパネルディスカッションでは、今泉教務部長がコーディネータとなり、第一部で支援機構について説明した馬本副学長と第二部で基調講演をされた北森名誉教授、また教育開発支援機構準備委員会構成員である黒瀬理学部教授がパネリストとなり、「今、求められる学修支援について」というテーマで活発な意見交換が行われた。

最後に馬本副学長から、講演者・パネリストに対し謝辞が述べられ、「本学の教育力向上に向けて取り組むべき課題はたくさんあるが、教員一人ひとりの活動によって改善が期待できる。来年度には教育開発支援機構が立ち上がるので、今後とも福岡大学の教育にご理解とご協力をいただきたい。」との閉会挨拶で報告会を終了した。

*この記録には、各説明・講演の概要のほかパネルディスカッションの内容、当日回収したアンケートの結果等を掲載した。教育改善に役立てていただければ幸いである。

*なお、本記録中の役職名は、平成23年10月22日当時のものである。

第一部

教育開発支援機構（仮称）の概略説明

教学担当副学長 馬本 誠也

みなさんおはようございます。私に与えられた時間は15分しかありませんので、主なポイントだけをお話して、詳しいことは本日機構準備委員会の先生方もお越しになっていますので、あとのパネルディスカッションでいろいろご質問いただければと思います。

まず、なぜこの教育開発支援機構が福岡大学で立ち上がる予定になっているかというところから説明したいと思います。ご存じのように平成19年に大学院設置基準、一年遅れて平成20年4月に大学設置基準が改正されて、学部、大学院の組織的なFDが義務付けられました。同じく平成20年12月の中教審の答申「学士課程教育の構築に向けて」の中でも、FDの組織化と実質化が求められています。そのような中で、平成20年度の大学基準協会による福岡大学の認証評価において、本学のFDへの取り組みは十分ではないという指摘を受けております。福岡大学では現在FD推進委員会を中心にFDを含む教育改善について検討し、各学部、各センターで教育マネジメントサイクルによるFD活動等に取り組んでいますが、これらの活動は個々の教員あるいは組織間で濃淡が生じているのが現状です。また、FD推進委員会での議論もFDの定義あるいは個人情報保護、日本語力テストといったものを巡ってその是非を議論することが中心となって、一番肝心のFDのプログラムや実施体制など、全学的な立場から本学の教育力を向上させるにはどうしたらいいかという議論が進んでいないのが実情でありました。そのためFD推進委員会自体からも現在の小委員会体制を見直すべきではないかという意見が聞かれるようになりました。

こうした課題に対応するために、FDの実施機関の設置を含めたしかるべき推進体制を実施する必要があり、また同時に現在の審議体制についても再検討し、本学の教育力向上を推進する体制を検討してきた次第であります。時系列に申しますと、平成22年4月15日のFD推進委員会において、全学的FD推進体制検討のための委員会のワーキンググループを設置するということでした承をいただいております。それから約一年かけて、本日もお見えの工学部の鶴田先生に非常にご尽力いただいて、平成23年1月13日のFD推進委員会、それから2月22日のFD推進委員会において、全学的FD推進組織検討委員会のワーキンググループから提出された答申案が了承されております。さらに平成23年3月2日の企画運営会議でもその答申案を了承しております。その後平成23年3月14日の大学協議会において、全学的FD推進組織に関する答申に基づいて、平成24年4月からの全学的なFD推進組織の開設に向けて教育開発支援機構準備委員会を平成23年度に設置するということが承認されております。次いで平成23年5月19日の大学協議会で準備委員会の構成員が了

承されました。時系列に申し上げますと、だいたいそういったプロセスをたどって今日に至っているわけです。

この表（資料1 スライド番号7）で見ますと、現在存在するのがFD推進委員会であり、これが新体制下では教育推進会議となります。FD推進委員会では各学部長から非常によい意見をいただいたり、各学部の取り組み等についてもご説明いただいたりしましたが、全学的なFDの取り組みのための実働部隊が存在しなかったわけです。今回この教育開発支援機構の下の点線で囲んだ部分が新しくFDの実働部隊として設立されることとなります。組織的展開としては具体的にどういうことを基本方針にするのかということ、三点だけ申し上げます。第一点として、高等教育に関する深い分析や社会ニーズの的確な把握に基づき、教育開発支援に関わる諸政策を企画・実施・広報し、教育における問題認識と解決方法の全学的な共有化を図るということが挙げられます。二点目に、教員の授業・学習指導・就職指導スキルの向上と新たなスキルの取得のために教員研修およびセミナー、カウンセリングを実施する、また、三点目に、組織的なFDをとおして教育そのものを研究対象とする姿勢についての啓蒙活動を行うということで、これらの活動をとおして、FDを実質化し深化していこうという狙いがあります。

本日は配付しておりませんが、資料としては全学的FD推進組織に関する答申というものが大学協議会あるいはFD推進委員会でも配られていますので、学部長なりにおっしゃっていただければいつでもご覧いただけるかと思えます。

では、今なぜFDなのかということ。多くの先生が共通認識を持っていらっしゃると思いますが、ここ（資料1 スライド2）に書かれているような状況が我々の目の前に座っている学生を見ても非常に現実的な問題として感じられるかと思えます。

まず入り口の部分ですが、近年18歳人口の減少により約54%の学生が大学に進学する大学全入時代に入っており、2人に1人以上が大学に来ているというユニバーサル化時代を迎えています。それとゆとり教育が一緒になりまして、現在多くの先生方から授業展開の難しさという点では、悲鳴に近いような声を聞くという状況になっております。一生懸命授業でしゃべっているのに学生は私語が多くてとても授業にならないとか、各専門科目を教えるにしても基礎学力が不足しているとかということが起こっております。これはやはりゆとり教育の弊害といえますか、現実に基礎学力がない学生が入ってきているということです。そしてもっと大きな問題は、昔と違って2人に1人が大学に行くような時代になって、なぜ自分がこの大学のこの学部で学んでいるかという目的意識や自覚がほとんど見られない学生が多いということです。そういう状況の中で、やはり大学教育のあり方そのものをもう一度考えていった方がいいのではないかと多くの会議等で聞かれる声であります。そのための解決策として、FDを行ってきたり、学修支援を行ってきたりと各学部単位で見るとそれぞれの学部でかなりのことをやっていたらと思えますが、大学全体の組織的な取り組みとなるとなかなかそれがネットワーク化されていない、ここに総合大学が抱えている問題の大きな落とし穴が存在していると思えます。

それから出口の部分ですが、グローバル化時代を迎えて日本人学生がなかなか就職できない、博士課程前期・後期を修了しても就職先がない、特に博士課程後期修了者の就職率・就職先は非常に深刻な問題となっております。今の経済市場を見ると学部学生でも日本人がなかなか就職できない状況があります。そういう中で我々は学生にどう指導していったらいいのか、どうキャリア意識を高めていったらいいのかという問題が現実的な課題として迫っております。



スライドの13番(資料1スライド13)をご覧ください。先ほどの表で示しました教育FD支援室、教育学修支援室それぞれの中でどういった活動をしようとしているのか、どういった支援をしようとしているのかをこの表に示しております。要するに一言で言えば、学生の学修支援をどうしたらいいのかということと、先生の教育活動を支援したいというそのための組織づくりだということを理解していただければと思います。こういう取り組みにこれからチャレンジしていくことになるわけですが、これをつくったからといってFD活動が改善されるかどうかということは、ひとえに構成員の先生方の協力によるところが大きいと思います。

教育改善というのは教員だけでは無理であり、やはり教職協働で事務職員の協力の下、教員・職員が共に活動していくというところにポイントがあるのではないかと思います。そういう意味では事務職員も教育者だという自覚を持って協力していただきたいと思います。教育改革というものは、何度も言いますが教職協働でないと成功しないのではないかと考えています。事務職員のほとんどは福岡大学卒業ですから、教育者としての自覚を持っていただいて、学生が20年30年と経ったときにああいう職員、ああいう人になりたいと思うだけでも学生の自覚は変わってくると思います。私どもも一緒になってこれから福岡大学の教育改善に尽力したいと思っておりますので、ぜひご協力お願いいたします。

あっという間に時間が経ちました。いろいろと言いきり足りないことはあったと思いますが、また後のパネルディスカッション等でご質疑にお答えするかたちでお話できればと思います。ありがとうございました。

第二部 基調講演

今、求められる学修支援について

順天堂大学名誉教授 北森 義明

北森と申します。どうぞよろしく申し上げます。私は福岡にいろいろなご縁がありまして、ダイエーホークスというプロ野球のチームで、王さんが監督をされていたときに私どもはあのチームをもっと強く勝ち続けられるようなチームにするお手伝いをさせていただきました。今日も午後のセッションに用意してまいりました、“あなたの学習スタイル”というチェックリスト付きのツールをダイエーホークスでも使用して、今のソフトバンクホークスへつながっているわけです。

先ほど学長先生からもお話がありましたようにパッシブなスタンスではなくアクティブなスタンスで学びを勝ち取っていく、私どもはそういう夢を持って今いろいろな大学のお手伝いをさせていただいています。今日はその一端をご紹介していろいろ先生方からお教えいただきたいと思っております。

私は今、武蔵野大学で「自己の探求」という名前の授業を担当させてもらっております。この「自己の探求」という授業はどのような授業なのかというのは、みなさんのお手元に資料とプログラムがあると思いますが、具体的には土曜日・日曜日の二日間連続で朝から夕方まで通しでやっていく授業です。オリエンテーションが終わったら、「あなたの学習スタイル」という自分が何かを学ぶ、あるいは学ぼうとしたときの自分の特徴がわかる簡単なチェックリストをやりながら、それをチェックして集計すると自分の学びのスタイルがグラフで表されます。学生を見ていると、そういうグラフが出来上がると立ち止まらず他の学生のところに行って「自分のはこうだけど、あなたのはどうだった？」とこちらが何も言わないでも会話を始めます。そして自分達で自己紹介が始まるのですが、そういう感じになってきたときに私どもは一つ提案させてもらっています。普通のクラスは40名で1クラスなのですが、それを6~7名のグループに分けて学んでいくという進め方をしたいので、今の学習スタイルのチェックリストを活用して、できるだけ自分とはタイプの違う人とグループを組んでみよう、学部学科、学年ができるだけ交じり合うようにグループをつくらうという提案をしています。

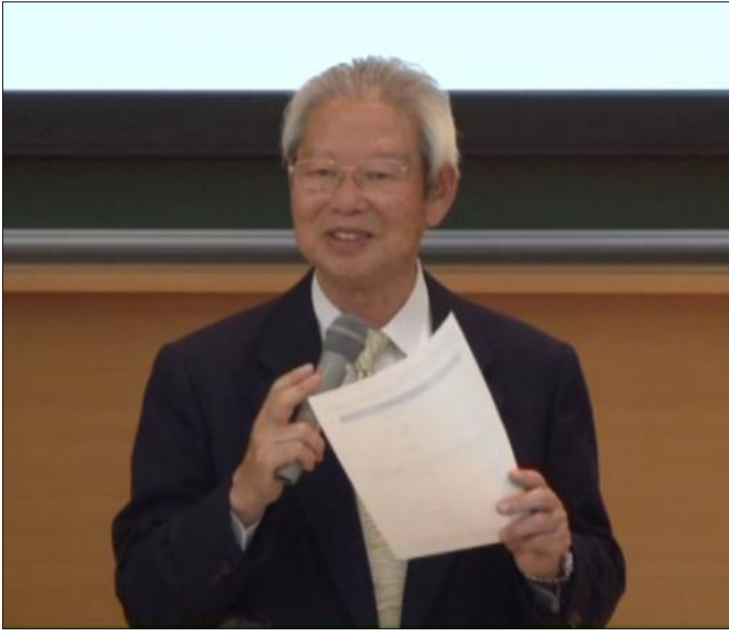
グループができれば、③の「記者会見」に入りますが、これは記者会見の形式を借りた自己紹介です。本日午後の研修に参加していただく先生方には、この学習スタイルのチェックリストも記者会見も体験していただきます。そしてその後に「総当たりインタビュー」というものをやりますが、記者会見は比較的平面に広がっていくイメージの自己紹介であり、「どこで生まれたの?」「何が好き?」「この町のどういうところがどういう理由で好きなの?」というように広がっていきます。総当たりインタビューというのは、私どもからいくつかの話し合いのテーマを提供するための資料を持ってまいりますので、その中から自分達で話し合いのテーマを決めます。例えば、「子どものころ

好きだった遊びは何?」「缶けり」「缶けりのどういうところが好きだったの?」「そして?」「それから?」というように促すことをしていき、またその人がどうして缶けりが好きなのかということをどんどん掘り下げていくようなインタビューをお互いにしあっています。たった 7~8 分とか 10 分ぐらいの時間なのですがそれを繰り返して、例えば 7 名のグループだとしたらそれぞれが 6 名の人と語り合うため、かなり深いレベルに掘り下げていくことができます。このような感じで学生たちとやっていくわけですが、そうすると面白いことに最初 9 時にオリエンテーションに集まってきたときは、教室の雰囲気は重くて、視線も合わず、あまり語り合うことに積極的ではなかったのが、午後になって総当たりインタビューを繰り返しやっていく間にグループの雰囲気は全く変わっていきます。これは私がこうして話しているだけではわかっていただけないと思うので、本日午後、総当たりインタビューのところまではぜひご体験いただきたいと思います。その後コンセンサスによってグループ決定をするための面白い題材を持ってきましたので、それについてお一人お一人のお考えを決めていただき、それをグループ内で持ち寄って、グループで話し合っグループ決定をしていただきます。そしてまた、どうして自分達はこういう意見になったのだろうというグループ決定をするまでのプロセスを振り返って何かを学んでいきます。ここでは個人決定もするわけですが、個人決定をグループに持ち寄って今度はグループで話し合い、グループ決定していく、そうするとそのプロセスもさることながら結果が面白い。妥当な解答というものがない用意されているのですが、グループで話し合っ、コンセンサスを求めて語り合っくとその妥当解にだんだん近づいていきます。どうしてそんな現象が起きたのだろうということをもた振り返ってみるのです。こういった流れで第 1 日目は終わります。

そうすると個人決定がだいぶ違ってくる体験をしまするので、自分の価値観をはっきりさせてみる、はっきりさせるようなアプローチを試みるというのはどうだろうという提案をさせてもらっています。本日はこのところはできませんが、その下の「私のライフポジション」というのは、心理療法のための理論体系で理論分析というものがありますが、その中のキーワードの一つです。自分はこの立場、この立ち位置で生涯生きていこうと決めている、というようなことです。まず自分の価値観がはっきりして、それから今度はライフポジションという立場から自分を見つめ直す、そしてコミュニケーションという角度から見つめ直してみようということです。そうやっていくと、最初に集まったときは全然違ったグループの雰囲気になってきます。そのようになってきたところで、グループワークで「バスは待ってくれない」という実習を用意してきましたので、これも本日本体験していただきます。

資料 2 に武蔵野大学のこともいろいろ書いております。また資料 2 別紙 2 には武蔵野大学の伊藤さんという事務職員が書いた論文がありますが、私が申し上げたことをうまくまとめてありますので、関心をお持ちの先生はあとでご覧いただければと思います。

私を武蔵野大学に呼んでいただいてから数年間が経ちましたが、最初、キャリア教育ということは何をやるのかという疑問を持って行ってみると、ほとんど職業教育に時間をとられているという状態でした。そうではなくもう少しやることのあるのではないかと、自分の生き方と対峙してみる、あるいは自分についての印象を友達に聞いてみる、そのようにして自己理解を深めていくことが必



要になるのではないかということで、「自己の探求」という授業をプログラムしてやっております。映像（資料2 スライド5）を見ていただきたいと思います。私はキャリア教育に必要なのはスタンスではないかと思っています、スタンスとは取り組み姿勢のことだと理解して使っております。自分の取り組み姿勢とはどういうものなのだろう、友人のはよくわかるが自分のはなかなか見えにくいという体験もするわけですが、自分自身がどの

ように取り組もうとしているのかと考えたときに、よく聞かれるのは「本気で考えている？」「本気で思っている？」という問いかけです。

今日は「自己の探求」という授業についてご紹介させていただいたのですが、資料の終わりの方（資料2 スライド11）に「その他の展開について」という資料がありまして、これらの研修は私どもの仲間で作ったラーニングバリューという会社がやっているのですが、そのラーニングバリューと一緒にいろいろやってきた仲間を今日は一人連れてきておりますのでご紹介いたします。本田と申します。どんなことをやらせていただいているのかということをお話しさせてもよろしいでしょうか。私よりもずっと詳しい者ですので、お話を聞いていただければと思います。

（ここから本田氏）本田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。今、北森が少し話しましたが、武蔵野大学ではスキル系のプログラムを平成15年ぐらいからずっとやってきたような状態で、私どもはそのぐらいから一緒にやらせていただいているのですが、頭ではわかっているけれども動けない学生がいる、それからどうやら今の学生は自信がないという方が非常に多いようです。そういうことを先ほど北森が申しました自分を知っていくプロセスに基づいて、自分のことはなかなかわからないので他人の力を借りてやろう、そうするとどうやらその場がどんどんあたたかくなっていくというようなことも体験してもらいながら、短期間でそういう行動基盤のようなものに少し気付いたり、人に関心を持ったりということができれば、その後のいわゆるスキル系も身に付くのではないかということで、武蔵野大学ともそういう授業を開発して北森と一緒にやってきました。武蔵野大学では、スライド11にあります、ファシリテーション研修というものを教員の方々とずっとやっていたり、職員の方々とはチームビルディング研修というものをやったりしています。

今日テーマになっているFDの推進という話もそうなのですが、全国的に今学生FDということが動き出しているのはみなさんご存じかと思いますが、武蔵野大学を含めて今非常にポイントとなっているのは、教職員、学生と一緒に体験するということです。私どもの顧客でもよくあるのですが、

学生と体験していくとどうやらうちの学生ってこんな学生だったの？ということが次第にわかってくる。昨日も福岡大学の学生さんが地震の被災地の支援に行かれたという話をお聞きしましたが、学生と同じ体験をしていくと、うちの学生はたいしたものという認識になってくる。そしてそういうことを言う先生を見て、また学生さんもこんな先生に教えてもらえるなら頑張って勉強してみよう、この先生の授業なら素直に聞ける、こんな厳しいレポートを課されるけれど、自分のことを見てくれているのだから一生懸命やってみようという気に自然となってくるというようなことも実際に起こっているのではないかと思っております。先ほどもありました武蔵野大学の伊藤さんの論文を資料として入れさせていただいたのですが、武蔵野大学では、伊藤さんという人事課長をはじめ職員の方が中心となってそういう改革をされているということです。学生と一緒に学んでいく、学生から学ぶということも私たちはFD、SDそれから学修支援には非常に重要なのではないかと思っております。

（ここから北森氏）今まで本田と私でプログラムについてお伝えしてきたわけですが、そういった授業を受けた学生から「この授業で改めて自分のことを知ることができたし、チームワークや協調性の大切さを実感した。」「自分をより深く知ることができて、これからの自分を変えるための目標になると感じた。聞くときは目で聞こうと思った。」というような感想が寄せられています。

まだ「何をあの人は言ったのだろう」という感じだと思いますが、また午後の研修にぜひおつきあいいただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

パネルディスカッション

今、求められる学修支援について

パネリスト

| | |
|-------------------------|-------|
| 教学担当副学長 | 馬本 誠也 |
| 順天堂大学名誉教授 | 北森 義明 |
| 理学部教授（教育開発支援機構準備委員会構成員） | |

黒瀬 秀樹

コーディネータ

| | |
|------|-------|
| 教務部長 | 今泉 博国 |
|------|-------|

（文中、敬称略）

【今泉】 それではパネルディスカッションを始めさせていただきます。本日のテーマは「今、求められる学修支援について」ということですが、「福岡大学に今、求められる学修支援について」という意味で語っていただきたいと思います。先ほども登壇いただいたお二方と理学部の黒瀬教授に登壇いただいております。馬本先生からご紹介いただきましたように、教育開発支援機構準備委員会というものが立ち上がりまして、二つの支援室をつくるということで今準備を進めておりまして、我々はそれぞれ役割を分担しております。教育学修支援室の室長役として黒瀬先生がその任にあたっておられます。そして、この支援室で具体的にどのような支援を学生にしていくのかしっかり議論していただいておりますので、初めに黒瀬先生に学修支援室の役割についてお話をしていただきたいと思います。お願いいたします。

【黒瀬】 理学部の黒瀬です。こんにちは。私はここ 7 年間ぐらい工学部のいくつかの学科と私が所属する理学部応用数学科の数学のリメディアル教育をマネジメントしておりました関係で、なぜか機構の準備委員会なるものに引き込まれまして、こういう場にまで引っ張り上げられている次第です。よろしくお願いたします。

先ほど教務部長からご説明がありましたように、機構は正式には教育開発支援機構と申しまして、教育を開発するという仕事と支援するという仕事があります。特に支援にあたっては前のスクリーン（資料 1 スライド 13）にありますように、教育 FD 支援室と教育学修支援室という二つの支援室を設けております。私は教育学修支援室の方を主に担当させていただいているわけですが、馬本先生の話にも北森先生の資料にもありましたように、入学時に学生はけっこうな割合ですでに問題を抱えております。意欲の面や学習習慣、そして学力不足はだいぶ前から指摘されていることですが、いろいろな面で一面的な見方では捉えられない多様な学生が出てきておりまして、私たちの大学の

各学部・センターで全ての学生を扱うのはかなり困難が伴っているのではないかと想像するわけですが、そこで全学的な立場から学生への支援をしましょうということで、学修支援室の話が進んでおります。

主な業務としましては、この前のスクリーンに掲げておりますし、お手元の資料の資料1スライド13にもありますが、いくつか大きく学修支援室の業務を分けております。

まず学生の実態調査ですが、これはやはり今の学生の実態を正確に知らないとい何もできないだろうということで、全学的な立場から学生の実態調査を扱ったらどうかという話をしております。学生部が今やっておりますような「学生生活調査」にも関連しておりますでしょうし、あるいは日本語力テストなどといった学力テストも関係あるでしょう。全学的な立場から今の学生がいったいどうなっているのかということ进行调查したいと考えております。そして二番目に基礎学力向上支援というものがありますが、やはり最初に問題になっていたのは学力不足で、そのあたりをどうするか、どのぐらいの割合の学生が支援を必要とするかは各学部で違うのかもしれませんが、かなりの割合できちんと学力を向上させてあげないといけない学生が増えていると思います。入学前教育あるいは補完教育、リメディアル教育といったものが必要になるでしょう。ことによったら接続教育などもそれに関わるかもしれません。

それから、その次の学修支援ですが、基礎学力向上とは違うもっといろいろなものが支援として必要なのではないかとということで、北森先生のお話にもありましたように、自分とは何であるかということから始まって、いかに大学で学修し、あるいはどのようなかたちで社会に出ていくかということを考えるためにキャリア教育が必要とされています。それに伴って大学においてどういった過ごし方をするかということで、初年次導入教育が必要となるでしょう。

その次の先導的人材教育はあまり一般的ではない言葉ですが、いわゆる学力不足あるいは問題があって支援を必要としている学生だけではなく、大学には非常に活力があり、意欲的・積極的に学んでいこうとする学生ももちろんたくさんおります。そういった学生ができるだけもっと上にいけるよう支援するプログラムが必要なのではなからうかということで、先導的人材教育というようなことを掲げております。この右側に書いておりますピアサポーター、スチューデントアシスタント、ティーチングアシスタントなどは代表的なものです。ピアサポートといいますのは、要するに仲間の仲間による支援という意味なのですが、学生同士の支援ということになると、例えば入学時に上級生が新入生のケアをするとか、あるいは学習面でも上級生が下級生の世話をするなどといったサポートのことです。TAに関してはよくご存じのことと思います。それからそこに書いておりますPBLというのは、プロジェクト型教育といひまして、一つのプロジェクトを立てて学部横断で学生たちがチームを組んで学んでいこうというもの。福岡大学でもそういった例はいくつか見られます。最後は学生の相談およびそれに対する対応ということで、学生相談室あるいはサポート教室の運営などといったものが挙げられると思います。

おおまかに挙げましたが、このように非常にさまざまな学生に対する支援を考えているわけですが、一つ誤解のないようにしていただきたいのは、この教育学修支援室は各学部・各センターがすでに学生に対して行っているいろいろな支援を全学的に一手に引き受けましょうということではな

く、各学部・センターが行っている支援を支援させていただくということで、非常にわかりにくいのですがそういうスタンスで業務を考えております。もう少し具体的に申しますと、こういったことを各学部・センターでやろうと思われると、例えば予算の面あるいは人的な面でどうしたらよいのだろうと思われることがあるでしょう。予算的な面ですと、例えば講師を雇いたいという場合に、ご存じかと思いますが機械器具費、実験実習費だと講師料は出せません。そういった場合に機構の支援室が、今でいう「魅力ある学士課程教育支援」事業のような予算を持っていれば、各学部・センターに講師の予算を割り振ることができます。あるいは人的な問題について、例えば私たちの話の中で学生人材バンクという言葉が挙がっておりまして、学内には大変優秀な学生も多くいるでしょうから、そういう学生たちが先ほど申しましたピアサポーターとして各学部学科の学修支援のお手伝いに行けたらいいのではないかと考えております。また学生だけではなく講師にしても、すでに学内で活躍していただいております日本語講師等についても全学的な立場でお願いすると、各学部学科の学修支援が一步進むのではないかと期待しております。

また、予算と人材以外にこの支援室が提供するの企画と情報だと思います。例えば学内でどのようなことが行われているかというような教育情報について先生方はあまりご存じないかと思いますが、機構の準備委員会で調べてみますと、学内でいろいろな学生支援を行っておられることがわかりました。別個にやっていたらそれぞれでお互いに情報が少ないと思いますが、共通にできる部分は共通に、もっと全学的にすべき部分があれば全学的にというようなことができると思います。そういう意味で教育情報の提供、あるいはそれに基づいた全学的な学修支援に関しては支援室からの企画というかたちで実現できるのではないかと考えています。おおまかですが以上です。

【今泉】 ありがとうございます。資料1のスライド13に掲げてあることを詳しくお話していただきました。学生の実態調査という項目が一番上に挙がっておりますが、現在全学的に福岡大学が行っていますのが日本語力テストです。数年行っており経年比較もできるようになりました。今年の結果については先生方はご存じかと思いますが、本学の全体的なレベルを含め、低下が顕著になっております。もちろん、国語それも語彙力を中心としたテストですのでこれだけで全てがわかるということにはならないと思いますが、そういう経年比較の結果が出ております。併せて、大学教育にきちんとついていくために大学でも日本語力の支援をしたいということで、基礎学力向上支援というかたちで支援講座も開設しておりますが、残念ながら受講者は非常に少ない状況です。ただ、スポーツ科学部では講座を正課の中に組み込んでいただいて、きちんと支援されています。インセンティブとしてどういうものを与えるかということもあろうかと思いますが、学力の低い学生を一定の水準まで引き上げる具体的なプログラムを正課または正課外としてどのように位置づけるかということが今求められているのではないかと思います。

そういった学力低下の問題に加えて、質問にもいただいておりますが、もう一つにはコミュニケーション力というのでしょうか、学長がお話された言葉を使えば生活知が極端に落ちているという問題もあります。孤食という言葉もありますし、友達がいないために早めに教室に入れず授業に遅刻する学生がいる、そういう現実もあるようです。ですので、そういう意味では、今までのように

家庭や地域や社会で訓練を受けているわけではない子たちが大学に入ってきているのです。大学に入ってきて卒業するときには今までと違って、例えばよく言われているように卒業後三年したら三割のものが離職するといった状況下にあるわけです。社会の流動性が非常に高まっているなかで、学生が大学を卒業して、どのような職業に就こうともきちんと自分自身でしっかりとやっつけていける力、つまり学士力を大学でつけないといけないのです。学力低下、コミュニケーション力低下、そういう学生たちでもきちんとグローバルかつ知識基盤社会のなかで活躍できるような人に育てていけないといけない。そうしないと答申にも書かれてありましたように、尊敬される大学にはなり得ないということです。

だからこそ、このように教育FD支援室、教育学修支援室というところでしっかりと支援をしていく、実働部隊は黒瀬先生が先ほどおっしゃったように各学部・センターですが、企画、情報提供、分析などというものをこの二つの支援室でしっかりやっていくという方向性で我々は準備委員会でも採用人事も含めて諸々の準備を進めているところです。ここまで私どもがいろいろ話しましたが、関連するご質問も来ております。

馬本先生への質問ですが、今、学問知と生活知という言葉が出ましたが、大学ではコミュニケーション能力、社会的適応能力などいわゆる生活知を高めることをきちんと支援していくのかというような確認の質問もございました。私がすでにそこも大事だという話をしましたが、副学長からもこのことについてお話をさせていただければと思います。



【馬本】 それでは、質問内容を明らかにした方がいいと思いますので、質問なさった先生はもう一度みなさんの前でご質問させていただいてよろしいですか。私が読み上げてもいいのですが、先生から直接質問させていただいて、それに答えるかたちでご説明できればと思います。最初に寺田先生お願いいたします。

【寺田理学部教授】 理学部の寺田と申します。私が質問票の方に書かせていただいたのは、リメディアル教育であるとか日本語教育であるとかそういった教育をすればするほど、マスコミ、週刊誌などでは批判されることが多く、最近も週刊誌にある大学のことが取り上げられたことがありました。その一方で、我々が高校訪問に参りますと高校の先生方は手厚い教育を望まれていて、「福大さんに入れると冷たくあしらわれるから、〇〇大学の方がいい」と言われることもままあるといった状況で、どこまでやれば福岡大学として最も適切な学修支援なのか、本学および教育開発支援機構として目指していच्छるものをお聞きできればという質問です。よろしくお願いいたします。

【馬本】 私が教学担当の副学長になって各地域に説明に行ったときに、山口支部で今野教務部長（当時）と共に有信会の方たちと面談したのですが、そのとき私は保護者のみなさまに「福岡大学は面倒見のいい大学として、これから教育の充実を目指していきます。」という話をしました。その際に有信会の方から、大学は学生に甘過ぎる、自分たちのときは何もしてくれなかったし、それでいいのだというご意見をいただき、私も若干そう思うふしがあったので、ありがとうございますと申しましたが、そのときに当時の教務部長の今野先生が、今の学生がいかに以前の学生と比べて変わったか、そして、そういう学生の伸びしろを拓げるためには、やはり面倒見のいい教育をしていくことが大学教育に求められているということを諄々とお話されたので、さすがだなと思って私も感心してお聞きしていた次第です。

先ほど教務部長からもご説明がありましたし、先生方も現場で実感していच्छると思います。大学に入ってくる学生たちの基礎学力が目に見えて低下しています。これはなにも福岡大学に限ったことではなく、近郊の国立大学の先生方もおっしゃっていますので、本当に「ゆとり教育」の弊害が現実表れていると思います。それからもう一つ、社会構造的に、今までの地域社会や家族との関係が限りなく希薄になっているとかある意味では崩れ去っているように思います。昔はおじいちゃん・おばあちゃんなどが子どもに対する教育を行っていたり、あるいは私たちが小さい頃は、高学年の小学生が低学年の小学生にやっいいこと、やっはいけないことを教えるなど、自然に地域の環境の中で社会や人間関係等について学んだりしたのですが、そういう関係が崩れてしまっている現代の社会状況の中で、本来は初等教育、中等教育でやるべき子どもの教育の皺寄せがだんだん高等教育の方にきていくとか期待が高まっています。

人間力や社会人基礎力というのはどこまでやっいけばいいのかということですが、今まさに、多様な学生の中で自分がなぜこの大学で学んでいるのかということさえ気付かないでいる学生がたくさんいるわけです。特に総合大学には、そういう学生をいかに救っていくかということが今求められていると思います。ですので、教育開発支援機構としては、そういう多様な学生にどう対応してこの福岡大学で学ぶ喜びを知ってもらうか、また自分の一生をどうデザインしていくのかということまで含めていろいろと検討されると思います。そういう意味では、当面はいろいろな議論が出てくると思いますが、ともかく学生の学修支援に向けて一歩踏み出すことができるということは、福岡大学のFDにとって非常に大きな意味を持つのではないかと考えております。

【馬 本】次に経済学部の佐藤先生、質問をお願いいたします。

【佐藤経済学部講師】経済学部の佐藤です。大学というところは普通勉強を頑張るところ、学問を教えるところ、そしてコミュニケーション能力やストレス耐性を育み、自分の夢を発見するところだとされていますが、そういうことは例えばゼミやサークル活動であったり、あるいは一緒に学問を勉強したりというように、学生が勝手に得ていくものだと思っております。本日私は、学生が勝手に育んでほしいコミュニケーション能力や自己の探求といったものを大学として直接支援していくというように理解しましたが、それは本当に正しいことなのだろうか、今泉先生がおっしゃったのはそれをやらなければいけないということなのだと思いますが、これからそういう方向で進むのでしょうかという質問というかつぶやいてみたという感じです。

【北 森】先生のつぶやきから北森が感じたことを申します。そういう現場に立っていて、やはり必要性は感じます。なぜ自分がここにいるのかわからない、どういうわけでここに来てしまったのだろうとつぶやく学生に、どうしてそんな感じで来てしまったの？と説教しても始まらないと思います。そこで私どもは自分で自分を見つめる、そしてそれは自分の力だけでは及ばないと思うので友達や教員の力を借りながら進めていくというプログラムを行っております。このプログラムはたった二日間なのですが、その二日間で学生の態度、表情がすごく変わります。得たこと学んだことを最後に整理してみんなでシェアするのですが、その際に本当に感動して涙声で語りかける学生も結構います。そういう学生たちと触れ合うことで、私などはかなり勇気づけられている次第です。

【馬 本】北森先生ありがとうございました。佐藤先生、よろしいでしょうか。

次に鶴田先生からご質問をいただいております。一つはサバティカル制度の実現についてお約束は守っていただけますかということですが、本学の海外研修制度が1号から4号までありまして、これをよく見ると結構よい制度でかなり利用できるようになっております。ところがこの4年間の推移を見てみると、1号が少ないときは全学でたった2名しかいないのです。今年はきちんと9名ありましたが、もっともっとサバティカル、在外研修員の希望が出てもいいのではないかと考えております。それで、鶴田先生がおっしゃっているのは、こういう教育開発支援機構等でそれなりに頑張っている人には何らかのご褒美の意味を含めてサバティカルリープの特典を与えていいのではないかとということですよね。当然そういうことも含めて検討いたします。例えば、これは一度お話ししたことがあると思いますが、東京の駒澤大学あたりはそのあたりの貢献度をポイント化してチャンスを与えるなど、さまざまな工夫を各大学が行っているようです。そういうことも含めて、海外研修制度あるいは国内研修制度をもっと活用していただくようお願いいたします。今の段階ではこれでよろしいでしょうか。

それと他にも鶴田先生から質問をいただいております。先生、直接お伺いしてよろしいですか。

【鶴田工学部教授】 いわゆる教職協働に関して具体的な方策・方針がおりかどうかというご質問です。

【馬本】 私はこれまで教学担当として4年近く働かせてもらったわけですが、その間に気付いたことは、福岡大学の若手の職員がかなり成長してきているというか研修などを受けてそれぞれの部署で経験を積んできている人がたくさん育っているということで、そういう人たちをぜひ会議に加えて、学生教育を充実させるためにはどうしたらいいか一緒に考えてもらいたいと思っています。それから大学教育というのは正課科目と正課外科目・活動によって成り立っているわけですが、福岡大学はご存じのように「全人教育」という一つの教育の理念があります。したがって、これから学生を育てていくうえで、やはり事務職員と教育職員が共に共通のベクトルを持って、「全人教育」の完成を目指していくべきだと思います。そういう意味でこれから一緒になって教育に取り組んでいきたいと考えております。

【今泉】 質問はあと二つございます。一つは健康管理センター事務室の池田室長からですが、障がいをもつ学生が随分増えてきているということで、それに関しても十分な対応を必要としているのではないかと考えているということですが、これも学修支援室の一つの役割だろうと思います。もちろん健康管理センターと協働するということになると思いますが、学修支援室できちんと実態を把握して情報を共有し対応していかないといけないだろうと考えております。

それからもう一つは理学部の西田先生からいただいておりますが、「実働部隊」の解釈についてです。教育開発支援機構を「実働部隊」と表現することに違和感を持っておられていて、むしろ実働部隊は教職員一人ひとりではないかというご意見です。馬本先生、いかがでしょうか。

【馬本】 先生が書かれている「実働部隊は一人ひとりの教職員であるべきだ」という理解の仕方です。要するに、実際やっていくのは一人ひとりの教員なのです。それを組織的に行う実働部隊として今後専任の先生も採用しますし、組織として学生の学修支援を行うということです。一人ひとりの先生のお手伝いを組織としてさせていただくということです。

【今泉】 ありがとうございます。では少し戻りますが、先ほど教職協働というお話がありました。それに関連すると思われる質問を理学部の寺田先生から北森先生へいただいております。

本学でもエクステンションセンターで、ワークショップ形式で学生に自己を見つめさせるというプログラムを行っており、かなり効果を上げているという話を聞いておりますが、北森先生が今日お話された「自己探」は、教員にも有効に機能するのか、機能するのであれば実例をお聞きたいということです。

それからもう一点ですが、藤原副学長からもご質問をいただいております。「自己探」などに参加する学生の中には、意識の高い学生とそうではない学生が混在していると思われるが、意識の高い学生にとってはつまらない内容であるなど、意識の高低によって共通のプログラムがかえって問題に

なるケースがあるのではないかというご質問です。その二点が北森先生へきておりますので、よろしく願いいたします。

【北 森】 藤原先生の質問の方から申しますが、たしかにそういう面はあります。ですが、始末に負えない状態になったことはありません。どんな風になっていくのか不安になるときもありますが、ほとんどの学生たちは良識ある行動をとってくれます。

【藤原副学長】 先生がおっしゃったことはある程度理解はできますが、最近はずっと低い学生がいるということと、先ほど黒瀬先生もおっしゃったピアサポートあるいは薩摩藩が行っていた郷中制度もそうですが、上の学生が下に教えることは非常によいことですし、ある程度まではそれでよいと思うのですが、今度は上の学生がどこまで伸び代があるかということをお我々は非常に危惧しております。本学の学生は1学年が約5,000人おりますが、そのうち1%すばらしい学生がいるとします。それだけでも50人になりますが、彼らを大学の中に閉じ込めておくのではなく外に出すなどいろいろすることによって、日本を先導するような人材が年に50人から100人ぐらい出てもいいのではないかという気持ちがあるものですから、そういう学生たちを潰してはいけないなということをお心配しているところです。中だけの問題であればそれで何とかできるのでしょうか、もっと外向きに大きく羽ばたかなくてはいけないところもあります。本学は、全国の社長さんの中で本学出身者が最も多いということで一定の評判はいただいているのですが、独立心が強いために従業員が数名という社長さんが何千人もいるということですので、さらに日本や世界を牽引するような人材を創造していくことも重要なことでもあります。そのためのプログラムがあってもいいのではないかとということで、武蔵野大学でそういうことをやっているケースがあればお聞きしたいと思って質問したわけですね。

【北 森】 武蔵野大学では特別クラスのようなものを編成し、現在少しずつ始めているところです。まだお話しするまでに至っていないような感じですが、例えば公認会計士になりたいと言って結構能力も高い学生に対する支援を行っていく、そういうことも今手をつけ始めたところです。先生のご質問については、もう少し調べて回答させていただきたいと思います。

【今 泉】 本日午後からは「自己探」のようなグループ研修を行います。今回は先生方も事務職員も一緒になって午後の研修を受けることにしていますが、教員にとっての有効性を寺田先生が伺いたいとのことですね。

【寺田理学部教授】 教員の方にはなかなか理解されないのではないかと印象があるものですね。それから、そういった研修を積極的に受けられるような先生方、今日ここにいらっしゃっているような先生方は問題ないと思うのですが、そうではない先生方にどのようなことができるのかということも併せてお話していただければと思います。

【北 森】先生がおっしゃっているようなケースはあります。先生方、職員の方が一体となってファシリテーターとしてのトレーニング、ファシリテーショントレーニングと私どもは呼んでいるのですが、そういったトレーニングを受けて学生に対してのサービスを行っていくことを目的に、今までと違う感じで授業を展開していきます。先生方も事務職員の方々も学生も皆同じ立場でとてもよい雰囲気で歩いていくことがほとんどです。崩れてしまって困ったということはないと記憶しています。幸いにも私どもの中では、そういった体験はありません。非常にプラスの結果が出ています。

【今 泉】そういうプログラムに参加して体験されれば理解していただけるでしょうが、参加を促す手だてとしてはどのようなものがあるのでしょうか。強制というわけにはいきませんので、できるだけ多くの方々に参加していただけるような手だてを何か考えていらっしゃるかどうか、そこがポイントのような気がします。

【北 森】いい方法があったら私にも教えていただきたいと思うのですが、私どもは繰り返し、いいチャンスだからもっといいチャンスにしていこうという呼びかけをしています。先生方がその気になってくださると大変な効果があります。

【今 泉】ある大学では、以前は30いくつの偏差値だったのですが、大学改革が功を奏して、ほとんど全ての学部が偏差値50を超えて52とか55とかいった大学となり、現在はかなり高いレベルの学生たちが学んでいるところもあると聞きます。その中でも特別クラスをつかって先導的な人材育成にも目を向けているということです。

私は本日、社会的適応能力のない学生たちをどうするかという話を冒頭にいたしました。一方で藤原副学長がおっしゃるようにリードできるような有能な学生たちを育てる手だても必要だろうと思います。このことに関して黒瀬先生、今まで何か議論されたことがあれば教えてください。

【黒 瀬】藤原先生がおっしゃったように、本学でも上位に非常に優秀な学生がいると思います。本当に支援を必要としている学生の方ばかりに私たちのエネルギーがいつているということも事実で、そういう上位の学生もいるということを忘れずにずっと意識していなければいけないと思います。学修支援室の役割の一つとして、そういう活動的で可能性のある学生をもっと輩出したいという思いで、先導的人材への支援もしようではないかということになっております。まだ具体的な例や提案はないのですが、他大学の例を見てみると、PBL という、あるプロジェクトを立ち上げてそのプロジェクトの成功に向かって問題解決等を図って、自分の能力等をさらに磨いていき、そういった力を持って社会に出ていくというような教育もありますので、まずはそういう事例を学んだうえでいくつかの提案を学内にできればと思っております。

【今 泉】ありがとうございました。学生と教員、職員の三者が一緒になってお互いに刺激し合っ

て、高め合っていくような場も当然必要だろうと思います。しかし我々がなかなかそのような場を持っていないという現実もあろうかと思えます。そこで、教育開発支援機構では「教育サロン」というものをつくって、そういう三者が自由闊達に語り合って、自らを高め合ったらどうかということで、実は本日おいでになっている山口住夫先生が中心となってサロン立ち上げの準備を進めております。私からお話を振るかたちとなりますが、山口先生の方から教育サロンについて何かお話いただければと思います。

【山口工学部教授】あの図（資料1スライド7）の右下の教育支援機構の枠の中に、教育FD支援室と教育学修支援室がありまして、その真ん中に楕円形が書いてあります。よくよく見ると他のところは全部四角形なのですが、この教育サロンだけは丸で上から線が引っ張ってありません。本当は楕円形でもなくて形がないようなものなのですが、形のないものを形にするということで仕方なく楕円形にしました、というような存在です。

そこで、何をやるかという話なのですが、教育というものは先ほどからお話がありましたように、大学基準協会から言われたからとかあるいは支援室から勧められたからやるというのでは受け身です。教育で一番まずいのは、誰かがこう言っていますという内容をそのまま話すことで、それでは学生は居眠りします。方法についても同じで、人からやれと言われたことをそのままやっても学生は乗ってきません。教員自らがこれがいい、こうやってみようというやり方でやると、方法は拙くても学生は乗ってきます。みなさんは教育のプロですから、それぞれ学生の学力向上を願っているような工夫をされていることと思います。ところが、それが理論的、体系的にまとめられていないと会議には出てきませんし、論文としても出てきません。

そういった細かな工夫や経験をできるだけ集めて、福大オリジナルの教育方法を何とか確立できないかということで、そのためにはどうしたらいいかというと、雑談しかないわけです。飲み会という方法もありますが、まさか学内でお酒を飲むわけにもいきませんので、雑談できる場をつくらうということで、この教育サロンを考えました。先ほどどもどなたかつぶやかれましたが、批判的な話も積極的な話もできるだけ集めるということです。それから、なかなか業務が忙しくて来られない方もいらっしゃるでしょうから、ネット上でもそういう場をつくって自由な意見を募集したいと思っております。具体的にどうやるかということについては全く決まっておられません。そして会員制にする予定で、会員の条件は、会員になりたい方です。教員、事務職員の方、それと学生にも入ってもらい、教員と学生が同じ立場で議論します。学生の方がいいことを言うかもしれないですし、いろいろなことに気が付いていると思います。そういう意見は授業アンケートでは出てきませんので、これらを拾い上げ、何とかかたちにまとめて会議で提案するという方向で考えております。学生との距離も縮まるでしょう。先ほど学修支援室の方のピアサポートについて紹介がありました。主としてこのピアサポートに参加する学生を中心に、教員と同じ立場で学生もそこで雑談ができます。教育サロンについての説明は以上でございます。

【今泉】ありがとうございました。本日議論しているなかでもう一つ提言をいただきたいと思う

問題がございます。いわゆる出口についての問題ですが、また私からお話を振るかたちで申し訳ないのですが、出口管理について提言があれば、中村就職・進路支援センター長にお話いただきたく思います。さまざまな厳しい状況下で我々の大学は高いレベルの学生を育てていかざるをえないわけで、センター長として苦慮されているかと思しますので、何か提言があればぜひお願いしたいと思っております。

【中村就職・進路支援センター長】 今までのお話をいろいろと聞きながら、キャリア教育だけではなかったと思いますが、キャリア教育を例にしてお話させていただくと、私はキャリア教育というのはいろいろな条件の下から本来の教育がなかなかうまくいなくなってきたということを補う一つのキーワードとして捉えるべきだと思っています。したがってキャリア教育というのは今、「キャリアデザインプログラム」が進んでおりますが、新しいキャリア教育科目をつくり単位化するというのは、現状を見据えたときにはたしかに必要なことなのですが、そこで止まっていたはいけないうらうと思っております。それをやりながら最終的には教員一人ひとりが再度教育を見直し、つまり知の創造である研究と人材の育成である教育という二つのミッション、もちろん他にも社会貢献などいろいろありますが、大学のミッションをもう一度皆が見直していくキーワードとしてキャリア教育があるという考え方が大事なのではないかと思います。

先ほどのつぶやきに対して一点だけつぶやき返しますと、私は本来学生がいろいろなことをやりながら、将来について気づくべきだと思っております。それしかないと思うのですが、いろいろな条件の下でその気づき方が鈍くなっているといえそうです。逆にいうと我々大人が、語弊はあるかもしれませんがあまりにも便利な社会をつくり過ぎていくのかもしれない。キャリア教育において若者がどういうことをマスターするかということも具体的なこととしては大事なことでしょうが、我々教える側の大人が責任を感じながら、若者とどう関わっていくかということが大事だと思っております。抽象的になり過ぎましたが、時間もありませんのでこの程度にさせていただきたいと思っております。

【今泉】 ありがとうございます。もう時間も迫ってまいりましたが、どのようにまとめていか難しいところです。

来年の4月から二つの支援室が発足いたします。本日は学修支援室の業務内容に限定してお話を進めてまいりました。皆様方にアンケート用紙を準備しておりますので、来年立ち上がる二つの支援室に関していろいろな要望を出していただければと思っております。アンケートにはご意見を書いていただける欄も設けておりますので、ぜひ忌憚のないご意見を頂戴できればと思っております。

とにかく4月1日から稼働させていくということになりますが、本日何度もお話にありましたように実際に教育を行っていただくのは先生方ですし、それを支えていただくのは事務職員の方々です。また学生はその二者に対して刺激を受けて高まっていくと思っております。そういう高まりをできるだけ高く深くできるように、二つの支援室はしっかりと企画や情報を提供して支援していきたいと考えておりますので、立ち上げまではまだ日にちがありますが、ぜひいろいろなかたちでのご

協力をいただければと思っているところです。少し予定時間を超過してしまいましたが、これで第三部のパネルディスカッションを閉じさせていただきたいと思います。ありがとうございました。



閉会の辞

教学担当副学長 馬本 誠也

本日は大変有益なご意見をいただき、また福岡大学の教育改善のために有意義な議論ができたのではないかと思います。いろいろな改革の最中で、文部科学省などの規制によっていろいろな取り組みをせざるをえない状況ではありますが、基本的には福岡大学に入ってきた学生たちが社会に出て社会活動等に貢献するというキャリア教育、これが現在私たちに求められています。最近、就業力という言葉がよく使われておりますが、就業力というのは、社会生活において一人ひとりが主体的に生き、しかも他者と協調して働くという能力を有するというのが第一点です。それから二点目に、社会貢献を通して豊かな人生を各人が送ることができる、そういう基礎づくりの場として大学教育を位置付けていくと、我々がやらなければならないことは多々あります。そういう中でこの社会状況の変化等によって 21 世紀型の新しい市民性の育成が今求められているのではないかと感じております。その中で、私たちも含めて学生一人ひとりが他者との関係性において自己をどう捉えるかという意味では、今日の午後の研修などは非常に参考になるのではないかと期待しております。

最後に、授業というのは教員がいて学生がいて、今まで教員が一方的に知識を伝授すれば成立していたわけですが、今の状況においては、なかなかそれが難しくなっています。そのため初年次教育や導入教育等いろいろなことをやります。ただ、それと同時に学びのシフトと言いますか、従来型の一方通行型の教育はある意味では限界に来ているのではないかという気がします。今の学生は何らかの作業をさせて自らやってみようという気にならないと学習できない、つまりアクティブラーニングと言いますかラーニングバイドゥーイングと言いますか、そういう作業を通して学生が本当の自分に気付き始めることも可能になるのではないかということを今日の議論の中で感じました。

これから大変難しい時代に入っていくわけですが、私たち一人ひとりが教壇に立ったときに学生とどう向き合うかによって、このことは検証されていくと思います。そういう意味で教育改善において、教員一人ひとりの活動とそれを支援する組織というのが求められるのではないかと考えます。今後ともぜひ福岡大学の教育に共に力を注いでいきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

第5回 教育改善活動フォーラム 参加者数およびアンケート結果

◆参加者数

| フォーラム開催日 | 教育職員 | 事務職員他 | 総計 |
|-----------|------|-------|-----|
| 10月22日(土) | 43 | 75 | 118 |

◆参加状況(所属別の内訳)

| 所属 | 参加者数 | 所属 | 参加者数 |
|------|------|---------|------|
| 人文学部 | 8 | 医学部 | 4 |
| 法学部 | 0 | 薬学部 | 11 |
| 経済学部 | 3 | スポーツ科学部 | 1 |
| 商学部 | 7 | その他 | 1 |
| 理学部 | 4 | 事務職員 | 74 |
| 工学部 | 5 | 総計 | 118 |

アンケート 集計結果

アンケート回答件数：77人

【質問1】あなたの職種について

| 回答 | 回答数 | 割合 |
|--------|-----|--------|
| 1 教育職員 | 30 | 39.0% |
| 2 事務職員 | 45 | 58.4% |
| 3 その他 | 2 | 2.6% |
| 総計 | 77 | 100.0% |

【質問2】第一部「教育開発支援機構(仮称)」の概略説明は、参考になる内容でしたか。

| 回答 | 回答数 | 割合 |
|----------------|-----|--------|
| 1 とても参考になった | 11 | 14.3% |
| 2 参考になった | 43 | 55.8% |
| 3 どちらともいえない | 18 | 23.4% |
| 4 あまり参考にならなかった | 5 | 6.5% |
| 5 参考にならなかった | 0 | 0% |
| 総計 | 77 | 100.0% |

【質問3】 第二部「基調講演」は、今後の参考になる内容でしたか。

| 回答 | | 回答数 | 割合 |
|----|--------------|-----|--------|
| 1 | とても参考になった | 11 | 14.3% |
| 2 | 参考になった | 34 | 44.1% |
| 3 | どちらともいえない | 22 | 28.6% |
| 4 | あまり参考にならなかった | 8 | 10.4% |
| 5 | 参考にならなかった | 2 | 2.6% |
| 総計 | | 77 | 100.0% |

【質問4】 第三部「パネルディスカッション」は満足のいく内容でしたか

| 回答 | | 回答数 | 割合 |
|----|-----------|-----|--------|
| 1 | とても満足である | 23 | 29.9% |
| 2 | やや満足である | 35 | 45.4% |
| 3 | どちらともいえない | 17 | 22.1% |
| 3 | やや不満である | 2 | 2.6% |
| 4 | とても不満である | 0 | 0% |
| 総計 | | 77 | 100.0% |

【質問5】 教育開発支援機構（仮称）に対する、ご意見・ご感想ならびにご提案等ありましたらご記入ください。（自由記述）

- フォーラムでも述べられた「教職協働」はFDには不可欠であるためFDとSDを合わせて考えるべきと考えます。
- 基礎学力の向上とともに、学生1人1人の「前に踏み出す力」すなわち主体性、自主性を伸ばすための取組みも必要を感じます。
- 少しですが、機構に対する理解が深まりました。
- 一部では甘やかしではないかと考えられる「学力・コミュニケーション力」の支援だが、大学での学生生活の充実、また卒業後の社会生活を生き抜く上で、とても重要なものだということが分かった。
- 支援機構が上から目線で指導するのではなく、教員・職員と一緒に悩んでくれること、解決策を模索する姿勢を望みます。
- 学生をアクティブに、教員もアクティブに、その方法を皆で考えたいと思います。
- 教育サロンの話をもっと聞きたい。（同意見1件）
- 教員の意見をオープンに述べる場を作ってほしい。
- 学生の質の低下の要因の1つに地域・家庭教育が成立しなくなっていることが挙げられてい

ました。その対応が、高等教育・大学教育に求められている現状ですと説明がありました。福岡大学がそのための教育を福大生に支援していくとされ、とても大切な事と思いました。全職員が協力していくことは重要なことと思います。そこでもう1つ、現在の学生が将来の子孫に対する教育ができるように支援していくことも必要ではないかと思いました。「三つ子の魂、百まで」と言われるように。福大を卒業したら、こういった教育を受けた学生であるとアピールの1つになればと思いました。

- 大学の支援リソースを集約して、有益な支援を提供できる、組織になるといいなと思いました。
- 新しい大学のあり方の第一歩として、支援機構のこれからの活躍に期待いたします。(同意見2件)
- 入学後の支援のみならず入学前の学習(修)の支援も今後スコープの中に入ってくる。具体的には本学が有する2校の附属高校からの入学者には入学前から自律した学習者への成長が望まれるところである。そうでないと最終学府である大学には多量の期待が集中することになろう。
- 本学の教育改革のスタートになると思います。全ての教員が主体的になった学生と向かい合ってほしいです。
- 組織を運用するのは人。教育に情熱のある人を教員・事務職員を配置して欲しい。中でも先生方が本気にならねば教育は変わらない。期待しています。
- 学生のために大学・組織があることを理解して、多くの教員が学生に臨んで欲しい。
- 全体(4年間)のカリキュラムとの整合性はどうか。
- (資料2別紙2)「リーダーシップ」「ファシリテーション」「マネジメント」の3つの要素が十分に機能することが必要ではないか。
- 何故この組織形態なのか?これまで各学部/センターがやっていることを支援するということだが、全体としての方向性が必ずしも一致しているとはいえないのではないか?その点からみて、大学としての指針(方向性)を示すなかで、各学部・センターの連携した取り組みが必要なのではないか?
- この2年間の附属高校の入学指導のあり方はおかしいと考えている。そういう取組みは機構ができたらどのようになるのか、あくまでこれまでやっているものの支援なのか、それでは成果は望めないように思う。
- 外部との接点をどのように学生に提供するのか、といった視点はないのでしょうか。
- この機構のエンジンが何か、お話を聞いてもよく分かりませんでした。
- 様々な学部の教員から意見を聞くことができました。持ち帰って検討したいと思います。
- 教育開発支援機構(仮称)が解決すべき課題、目指すべき姿、どのようなミッションに基づいているかが分かりにくい。一般的・抽象的内容に終始している。
- 学習したくない学生に学習させるためには、もっと「アメとムチ」が必要ではないか?例えば卒業できる人数を入学定員の半分までに制限するような「卒業定員」をもうければ、学習

したくない学生も学習せざるを得ないし、卒業できた学生は就職も楽にできるようになるのではないかと。熱血教師を育成するのは小手先の対策で、抜本的な問題解決にはならないと思う。

- 教育開発支援機構が学生の学力・コミュニケーション力の向上につながることに期待しています。キャリア教育の取り組みに学生が参加する手立てをもっと聞きたかった。
- 教育支援をどこまでの学生に実施するのかを教えてください。学力不足だがやる気のある学生だけなのか、学力不足で向上心もない学生を引き上げていくのか。大学で育む自主性との両立は可能なのか。教育職員にそれだけの時間があるのか。
- 社会の多様性の中、大学教育のあり方も昔と変わってきて、大学としていろいろな取り組みをしないといけない（学生、教員に対して）と思います。そういう意味でも学修支援室の活動には期待したいと思います。ただ、その中で（昔も今もおそらく変わらない大切なものだと思いますが）学生のやる気をどのようにしたら引き出せるか、学力・能力等いろんな問題があるとは思いますが、現実問題として「能力はそこそこあるのになかなかやる気が出てこない」学生がかなり多く見受けられます。1・2年生のうちにこのような学生をいかになくしていくか・・・いい方法があれば知りたいと思っています。
- 発足がやや遅いのではないかと気がする。来年4月からスタートするということであるが、一步一步着実な具体策が打ち出されることを期待している。（同意見2件）
- いろいろな角度から意見を募り、活発な議論をして、方向性を決めていくことが大切だと思います。
- 支援機構の組織が何を目標として設置されるのか具体的なものがまだまだ学内で見えていない。
- 学生が自由に参画できる“場”ができることを期待します。
- 認識不足の教員が多すぎるので、教員の意識改革も積極的に行ってほしい。（同意見1件）
- 教育力の評価を具体化して欲しい。
- 学部に有能な教育支援担当事務職員を置く（追加する）。
- ある程度のトップダウン方式が必要なのでは？
- 優秀な学生はさらに伸ばす支援を、ドロップアウトの可能性のある学生には昔でいう家族的、コミュニティー的きめ細かい支援ができる機構に育てたい。
- FD支援室と学修支援室の役割分担は何となく理解できましたが、両組織をどうリンクさせて推進していくのか。また、そこにかかわる事務組織体制がどうあるべきなのか、を今後具体的に示して（広報）いく必要があるのではないのでしょうか。教職協働を進めていく上でポイントとなるころだと思います。
- 教育FD支援に関していえば、試験問題や成績評価などを公開すれば教員が情報を共有することができ、自らの教育方法などを自発的に改善していくことができると思います。
- 短時間であったが、独りで文字を読むよりは背景等の多くの理解が得られた。資料の事前配付（Webページからのダウンロード等）があればさらに・・・。

- 学生がコミュニケーションを取れる施設を建ててもらいたい。(プラザ 50 など、学内各所に設置を要望します)
- 少子化の時代、様々な学生が入学してくるようになってきている。社会人となった時、福大で学んで良かったと思う人が多くなるような支援ができる組織となればと思います。そのためには、教職員が協力していかないといけないと痛感しました。
- 学部教育のみでなく大学院教育についても、教育開発支援機構で検討されるのですか？

【質問 6】 その他、ご希望の講演テーマ、ご意見・ご感想などありましたらご記入ください。

(自由記述)

- 非常にタイトなスケジュールでつめこみすぎ感が否めないと思いました。(同意 4 件)
- 今回のフォーラムに教育職員の方々の参加が少なかったことが気になります。(同意見 1 件)
- 資料と内容があまりリンクしていないように感じた。短い時間で講演をするなら、核心が何かすぐわかるような講演が望ましいと感じた。
- 第二部の基調講演は終始、午後のセッションの紹介が主となっていたようです。第三部のパネルディスカッションにつながる問題提起となるような内容であればよく理解できたように思います。特に時間に限りがあるような講演であれば、もっとテーマを絞込んだ方がよいと思いました。
(同意見 2 件)
- 武蔵野大学の取り組みを聞くことができ、大学別の比較ができたのでとても勉強になった。
- 協同(働)学習導入の有効性
- 第 6 回教育改善活動フォーラムの際に、パネルディスカッションがあるのならば、事務職員を参画させて欲しい。教職協働です。
- 「グローバル人材の育成」などのテーマではどうでしょう。
- 意欲の少ない学生に、様々な事に積極的に取組ませるようになるための方法というテーマで講演会を希望します。
- 外圧ではなく、大学が自分の意思でこの活動を行うという姿勢でなければ成功しません。トップの意識改革が必須です。
- 予備校の有名講師の模擬講義
- 予備校と連携したリメディアル教育
- 民間企業はそもそも大学で学ぶ知識など余り必要としていないので、民間企業が高卒と大卒の給料を同じにすれば、学習したくない学生は入学して来なくなるのではないか。もしくは学生を入学後に学習したいグループと職業訓練したいグループに分け、後者には企業の新人研修のような事をしてはどうか？
- 学生対象の「学ぶ」をテーマとした講演や体験(ワークショップ)を入学時から意識させる

ものが必要だと思います。また、学生どうしのつながりも希薄で単独行動の学生も多いようでそういった学生は情報も少なく充実した大学生活を送れているのだろうかと思います。

- 「福大の財政危機」など聞いてみたいです。方向性を知りたいです。
- キャリア教育に関しては、今までの研究者と教育者を兼ねた人ではなく教育専門の方を雇った方が有効ではないか。
- 学生やご父母の方からの質問やクレームに対して、どのような対応が望ましいかという事を、具体的な例を示しながら説明していただけるような講演。
- 諸星氏（桜美林大学副学長）による「大学改革」講演を希望します。
- もっと多くの職員への参加を求めるべきと思う。無理ならば別の方法を考える必要がある。
- 教育と研究の両方の話題。

第5回 教育改善活動フォーラム記録
(旧教育改善活動報告会記録)

2011年10月22日(土)開催

FD推進委員会・教務委員会
2011年12月

福岡大学